



# 抑うつ者を含む重要な二者関係における葛藤的コミュニケーションに関する臨床心理学的研究 - 言語コミュニケーションに着目して -

著者	三道 なぎさ
号	16
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第172号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00097224">http://hdl.handle.net/10097/00097224</a>

さん どう

## 三 道 なぎさ

学 位 の 種 類      博士（教育学）

学 記 番 号      教博 第 172 号

学位授与年月日      平成 28 年 3 月 25 日

学位授与の要件      学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻      東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
総合教育科学専攻

学位論文題目      抑うつ者を含む重要な二者関係における葛藤的コミュニケーション  
に関する臨床心理学的研究  
ー言語コミュニケーションに着目してー

論文審査委員      （主査）

教 授      長谷川 啓 三

准教授      安 保 英 勇

准教授      若 島 孔 文

### ＜論文内容の要旨＞

本論の目的は、抑うつ者を含む重要な二者関係における葛藤的コミュニケーションを言語レベルのコミュニケーションから明らかにすることである。抑うつ者の葛藤的コミュニケーションを説明するモデルとしては、Coyne(1976)の抑うつ者の相互作用モデル(以下、Coyne モデル)が有用である。このモデルでは、抑うつ者の抑うつ症状や安らぎ・援助の要求が抑うつ者の重要な他者に伝達されると、重要な他者は抑うつ者に否定的な感情を喚起したとしても、抑うつ者との関係性を考慮して、言語レベルでは支持的、非言語レベルでは拒絶といった矛盾したメッセージを同時に伝達すると説明される。抑うつ者はこのような矛盾したメッセージを受けると欺瞞と判断し、抑うつを悪化させると仮定されている。Coyne モデルに関する先行研究では、抑うつ者に対する重要な他者の拒絶反応、または重要な他者に拒絶を喚起させる抑うつ者の特徴のどちらか一方に焦点を当てる研究が多く、抑うつ者とその重要な

他者を双方向から捉えた研究はなされていない。また、Coyne モデル研究における結果の不安定性の要因として、言語レベルの検討が不十分であることが指摘されている。そこで本論では、抑うつ者の抑うつが維持・悪化するメカニズムを抑うつ者とその重要な他者による双方向の言語コミュニケーションから検討し、悪循環モデルを同定することを目的としている。

第1部は第1章と第2章から構成されている。第1章では、本論における抑うつ者を連続性の観点から定義した上で、Coyne モデルに関する先行研究を概観し、課題を述べている。第2章では、本論における実証研究の目的と意義について述べている。

第2部の実証研究は、第3章から第7章までで構成されている。第3章の【研究Ⅰ】では、架空の抑うつ的な発言に対する受け手の言語的応答にどのような特徴が見られるのかについて検討を行った。その結果、抑うつ的な発言メッセージに対する受け手の言語的応答は、非難、対処提示、楽観的展望、自己関与の主に4つに分類されることを示した。

第4章の【研究Ⅱ】では、抑うつ的な発言をする者にうつ病というラベルが付随しているか否かによる受け手の拒絶反応について、認知と応答発言から検討することを目的とした。その結果、ラベルの有る抑うつ者が抑うつ的な発言をした際、受け手は認知水準ではラベルの無い抑うつ者への拒絶感よりも高い拒絶感を抱くが、言語応答水準は自己関与の様なサポートティブな発言をする傾向が示された。一方、ラベルの無い抑うつ者の場合、受け手は認知水準ではラベルの有る抑うつ者への拒絶感よりも拒絶感は低いが、言語応答水準では楽観的展望や非難といったサポートティブとは言いがたい発言をする傾向が示された。これより、ラベルの無い抑うつ者は、ラベルの有る抑うつ者よりも他者の言語応答において拒絶を受ける可能性が示された。従って、以降の研究ではラベルの無い抑うつ者(以後、抑うつ者)を対象とした実証研究を行っている。

第5章の【研究Ⅲ】では、【研究Ⅰ】及び【研究Ⅱ】で抽出された重要な他者の発言(非難/対処提示/自己関与/楽観的展望)に対する抑うつ者のネガティブ認知、欺瞞認知、被拒絶認知について検討している。その結果、①発言カテゴリーに対するネガティブ認知は非難>対処提示>自己関与=楽観的展望の3段階に区切られること、②抑うつ者においては、曖昧かつ多義的なメッセージである楽観的展望及び対処提示に対して欺瞞認知が高く、非難及び自己関与に対しては欺瞞認知が低いが、非抑うつ者においては、非難に対する欺瞞認知が高く自己関与に対しては低いこと、③楽観的展望に対する欺瞞認知は抑うつ群>非抑うつ群であること、④発言カテゴリーに対する被拒絶感認知は、非難>対処提示>自己関与>楽観的展望の順に高いことが示され、楽観的展望のような発言は、受け手の抑うつ程度及び欺瞞認知の程度によって被拒絶感につながる可能性があることを示している。

第6章の【研究Ⅳ】では、【研究Ⅰ】～【研究Ⅲ】で示された、抑うつ者に対する重要な他者の言語発言(楽観的展望)、及び重要な他者に拒絶感を抱かせる抑うつ者の言語発言(矛盾した否定)を実際の会話場面を用いて検討することを目的としている。その結果、①重要な他者は、抑うつ者との会話の中で拒絶感を感じると、非明示的な拒絶を含みこむ楽観的展望をして対処しようとする可能性が示され、及び②抑うつ者は、重要な他者から楽観的展望を受けると欺瞞と判断する可能性が示唆された。これらに対し、③重要な他者は、重要かつ持続的な関係性が見込まれる相手から悩み相談を受けた際、共感または助言といった親身な

応答をしているにも関わらず、相手からそれを無効化するような矛盾した否定を受けると、拒絶感を喚起する可能性が示された。

第7章の【研究Ⅴ】では、【研究Ⅳ】で示された抑うつ者とその重要な他者との言語上の葛藤的コミュニケーションパターンを切断しうる言語コミュニケーションについて、実際の相談場面を用いて検討した。その結果、抑うつ者の相談に対し、被相談者である重要な他者が間接的自己関与発言をした場合、会話後、抑うつ者の抑鬱気分及び怒り気分は低減すること、また重要な他者が間接的自己関与発言をした場合、相談者の抑うつ程度に関係なく、会話後の活気気分が増加することを示している。

第3部の討論は、第8章と第9章から構成し、第8章の総合考察では、第2部の実証研究から、抑うつ者にうつ病ラベルが付随するか否かによって重要な他者による拒絶メカニズムが異なり、Coyne モデルを一部修正する結果が得られたことについて考察している。また、うつ病ラベルの無い抑うつ者の抑うつが維持・悪化するメカニズムを抑うつ者とその重要な他者による双方向の言語コミュニケーションから考察し、葛藤的コミュニケーションモデルを提案している。

## ＜ 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 ＞

軽度の抑うつについて「Coyne モデル」が対人相互作用から説明するものとして著名であるが、本論は先ずそれをさらに精緻なものにしようとして出発した。Coyne モデルに基づく研究結果の不安定性の要因として、一つには言語レベルの検討が不十分であることが指摘されてきた。

本論では先ず双方向の、抑うつ者と重要な他者間での言語コミュニケーションを検討した。その結果、以下に示す重要な点を見出した。

1. 抑うつ的な発言メッセージに対する受け手の言語的応答は、非難、対処提示、楽観的展望、自己関与の主に4つに分類されること。

2. 「抑うつ者」というラベルの有無による他者の反応を検討して、ラベルの無い抑うつ者は、ラベルの有る抑うつ者よりも他者の言語応答において拒絶を受ける可能性を示した。

3. 反対に「重要な他者」は、重要かつ持続的な関係性が見込まれる相手から悩み相談を受けた際、共感または助言といった親身な応答をしているにも関わらず、相手からそれを無効化するような矛盾した否定を受けると、拒絶感を喚起する可能性を示した。

4. 介入的コミュニケーションの特徴として、抑うつ者とその重要な他者との言語上の葛藤的コミュニケーションパターンを切断しうる言語コミュニケーションについて、実際の相談場面を用いて検討した。その結果、抑うつ者の相談に対し、被相談者である重要な他者が間接的自己関与発言をした場合、会話後、抑うつ者の抑鬱気分及び怒り気分は低減すること、また重要な他者が間接的自己関与発言をした場合、相談者の抑うつ程度に関係なく、会話後の活気気分が増加することが示された。

5. 抑うつ者にうつ病ラベルが付随するか否かによって重要な他者による拒絶メカニズムが異なり、Coyne モデルを一部修正する結果を示し検討を加えている。

上記の結果は、いずれも抑うつとの相互作用モデルを精緻なものにする点で、重要なものを見出したと言える。審査委員会としては上記の諸点の発見について評価するものである。

問題点もある。それは最後に示された葛藤的コミュニケーションのモデルとして提案されたものの一般性について、やや性急で、なお議論の余地があることである。しかし論文全体には主に家族臨床の領野で展開されてきたコミュニケーション研究の歴史を踏まえた実証的なスタンスと研究デザインに工夫がある。また、そこから見出した実践上の知見も独自の新しいものと言ってよいものである。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。